

## 外国人の日本語文学

—国際語への歩み—

郭 南 燕\*

### 一、外国人と日本人との共著

過去二十年、外国人による日本語文学は脚光を浴びている。むろん外国人が日本語文学を書くことは近年に始まったことではない。1549年、イエズス会士ザビエル(Francisco de Xavier, 1506 - 1552)が鹿児島に到着した以降のキリシタン時代にまで遡ることができるだろう。

日本を三回(1579、1590、1596年)訪れた巡察使ヴァリニャーノ(Alessandro Valignano, 1539-1606)は、日本語はラテン語より語彙が豊富で、考えをより良く表現することができるが、話し言葉と書き言葉との間に大きな差があり、習得が非常に難しいので、どんなに苦勞して学習しても、我々外国人は結局、子供のレベルにしか達せないと書いている<sup>i</sup>。そのため、ヴァリニャーノは宣教師の日本語学習を鞭撻し、二回目の日本訪問時に印刷機を持参し、吉利支丹版の印刷出版を可能にした。吉利支丹が学習し記録した大量な言葉は当時の生きた日本語だと思われる<sup>ii</sup>。

宣教師の日本語研究の最高レベルを示すのは『羅葡日対訳辞典』(天草刊、1595)、『落葉集』(長崎刊、1598)、『日葡辞書』(長崎刊、1603)、ロドリゲス(João Rodriguez, 1561-1634)編著『日本大文典』(長崎刊、1604-1608)だとされる<sup>iii</sup>。『日本大文典』には日本語に対する深い理解と洞察があるだけでなく、日本古典文学の語句が数多く引用されている。典雅な日本語を身につけること

を宣教の必須条件とされたからである<sup>iv</sup>。

16世紀から明治初期までのキリシタン文学は、西洋人と日本人の共同作業によるもので、宣教を目的とする教理、祈祷、典礼、観想の解釈、聖書、西洋古典文学、日本古典文学の翻訳などを含む<sup>v</sup>。そこから外国人の日本語文学の淵源を見ることができるだろう。

烈しい禁教政策のため、外国人の日本語学習が許されない時期が長かった。中国や東南アジアで日本語を学習し、渡日を待ち望む宣教師がいた。例えば、『英和和英語彙集』(バタヴィア刊、1830)を編纂した宣教師メドハースト(Walter Henry Mehurst, 1796-1857)や最初の日本語訳聖書『約翰福音之伝』(シンガポール刊、1837)を試みたギュツラフ(Karl Friedrich August Gützlaff, 1803-1851)は海外で日本語を習得したのである<sup>vi</sup>。

一方、幕末期、パリ外国宣教会が密かに宣教師を日本に派遣しはじめた。1844年フォルカード神父(Théodore-Augustin Forcade, 1816-1885)、1855年カション神父(Eugène-Emmanuel Mermet Cachon, 1828-1889)、ジラルール神父(Prudence Seraphin-Barthelemy Girard, 1821-1867)、フュレ神父(Louis-Theodore Furet, 1816-1900)が琉球語学習の名目で那覇に到着する<sup>vii</sup>。1858年日仏修好通好条約が締結されると、もっと多くの宣教師が派遣された。その中で大きな足跡を残したのは1868年長崎に到着したド・ロ神父(Marc-Maria de Rotz, 1840-1914)である。

ド・ロ神父は非識字層の農漁民もキリスト教が理解できるように、漢字を制限し、仮名中心の

\*国際日本文化研究センター准教授

活版印刷物を出版し、俗称「ド・ロ版」といわれる<sup>viii</sup>。ド・ロ神父は日本語の会話力があまり高くないので、説教は日本人助手の中村近蔵に頼っていたといわれる<sup>ix</sup>。だが、ド・ロ神父はローマ字で日誌を書き、農業の手順、金銭の出入り、救助院の作業、子供達へのプレゼントを几帳面に記録していることからみれば、日本語のレベルは低くはないようだ<sup>x</sup>。ド・ロ版の「オシエ」には、隣人愛のおきての七つの慈悲を当時の言葉によって和らげて次のように印刷されている。

ヒモジキ人ニハタベモノヲ

(飢えたるものに食を与ふること)

カワキタル人ニノミモノヲ

(渴したものに飲物を与ふること)

ビンボウナル人ニハキモノヲバ

(肌をかくしかねたるものに衣類を  
与ふること)

ヤドナキ人ニハヤドヤヲバ

(行脚のものに宿を貸すこと)

ジユウナキ人ニハアガナイヲバ

(捕われ人に身を請ること)

ビョウ人ニハカイホウヲ

(病人とろう者をいたはり見舞ふこ  
と)

死ニシ人ニソウレイヲ

(人の死骸を納ること)

カナフホド アタフルハ

カラダノセツジヒノショサ

(明治一二年、ド・ロ)<sup>xi</sup>

このような口語体・仮名中心の書き方は、児童文学の文体を想起させてくれる。

バリ外国宣教会に派遣されて来日した宣教師たちは多くの著作を残している。その中で特に注目すべきなのは次の4人であろう。ビリヨン(Aimé Villion, 1843-1932)は約5冊、リギョール(François-Alfred-Désiré Ligneul, 1847-1922)は約70冊、レゼー(Lucien Drouart de Lezey, 1849-1930)は約20冊を、それぞれ刊行し、ラゲー

(Emile Raguet, 1854-1929)は日本人と共に『聖書』の全訳を完成し、1890年から1931年まで約15冊を出版している。彼らの著作は、ほとんど彼らの「述」と「閲」で、日本人助手の「記」、「著」、「譯」、「編」となっている。彼ら自身の「執筆」はあまり見当たらない。

ビリヨンの著名な『日本聖人鮮血遺書』(やまとひじりちしおのかきおき)(1887)は主にパジェス(Léon Pagès, 1814-1886)の*Histoire de la religion chrétienne au Japon*(日本吉利支丹宗門史, 1870)と独自の調査に基づいて17世紀から18世紀までの殉教者史をまとめたものである。ビリヨン本は、1887年初版から1931年7版まで増版し<sup>xii</sup>、内田魯庵(1868-1929)の『獺の舌』に紹介され、幅広く知られ<sup>xiii</sup>、山路愛山(1864-1917)、徳富蘇峰(1863-1957)、芥川龍之介(1892-1927)、大川周明(1886-1957)、木下杢太郎(1885-1945)、吉野作造(1878-1933)などにも閲読され、日本社会に広範な影響を与えたと見られている<sup>xiv</sup>。

松崎実 はビリヨン本を解説、訂正、増加する目的で著述した『考注切支丹鮮血遺書』(1925)の中で、ビリヨン本は、京都滞在以来の説教を日本人助手加古義一が編集したものと言及している<sup>xv</sup>。松崎は、ビリヨン本の初版は「外人が不自由な日本語で口述したものを日本人が筆記してそれを文章に直して編んだ」もので、間違いが多く、「記述粗慢」、「用語や修辭の稚拙」が目立つが<sup>xvi</sup>、1926年6版本になると「殆ど面目が一新されたと云へる程増補改訂され」、「用語や修辭が異な」るようになったと評価している<sup>xvii</sup>。

しかし、ビリヨン本のかの初版は、新村出(1876-1967)には、「文章通俗平明にして信仰の情熱の能く人心を鼓動せしむる点に存せり、従ひて本書がいはゆる殉教実録として読物の随一に位せる」と褒め称えられた<sup>xviii</sup>。新村と松崎との評価はかなり違うが、確実にいえるのは、加古義一がビリヨン本に大きく貢献していることである<sup>xix</sup>。その後、ビリヨンと加古はさらに数冊の本を共

同制作した。たとえば、『婆羅門教論：仏教起原』（1889）<sup>xx</sup>、『山口公教史』（1897）<sup>xxi</sup>、『長門公教史』（1918）<sup>xxii</sup>がある。ビリヨンに関する伝記や回想は、彼の日本語力についての言及があるが<sup>xxiii</sup>、彼の著書の成り立ちについてはほとんど触れていないようである。

ビリヨンの日本語知識は、彼がシュタイヘン神父 (Michael Steichen, 1857-1929) の英語版 *The Christian Daimyos* (1903) を翻訳して1929年出版した『切支丹大名』から見る事ができる<sup>xxiv</sup>。原書のフランス語版 *Les Daimyô chrétiens* (1904) は吉田小五郎に日本語訳され、1930年出版されている<sup>xxv</sup>。

ビリヨン訳の「序文」に、「茲に拙き筆を以て翻訳出版したるは悼むべき故スタイシェン師の遺書である」<sup>xxvi</sup> という謙遜な言葉を使っているので、この翻訳は主にビリヨン自身のものではないかと考えられそうだ。英語版と仏語版の冒頭部のビリヨン訳と吉田訳とを比較してみよう。

ビリヨン: 西暦一五四九年（天文十八年）八月十五日、フランシスコ、ザヴェリヨはキリスト教を日本に布教する目的を以て九州鹿児島に渡来したのであるが、此日こそは日本に於ける宗教史並に政治史中に永く記念せらべき日である。即ち当時欧米諸外国から全然孤立してゐた特殊の事情の下にある日本国民が、フランシスコ、ザヴェリヨの渡来した事によつて此等キリスト教諸外国と国際上の交友関係を開始するの機会が与へられたのである。<sup>xxvii</sup>（下線部は引用者）

吉田: フランシスコ・ザベリヨが鹿児島に到着した日、一五四九年八月十五日（天文十八年七月十二日）は、日本の政治史・宗教史の上に、永く記憶されるであらう。実に、この日こそ、当時まで深い淵を以て隔てられてゐた、この不思議な国民を、基督教徒の大家族に引入れようとする計画の樹てられた最初の日なのである。<sup>xxviii</sup>

以上の引用からみられるように、ビリヨン訳の文語体と違って、吉田訳は口語で読みやすく、「流麗」と評価されてよい<sup>xxix</sup>。しかし、ゴツゴツとしたビリヨン訳は、三カ所の下線部が示しているように、より多くの情報が含まれている。実際、下線部の内容は英語版と仏語版にはなく、ビリヨンが付け加えた啓蒙的な知識である。もしもこれはビリヨンの単独訳なら、その日本語力の高さがわかる。しかし、伝道、社会事業に忙殺されたビリヨンは、著作を書く時間が非常に限られたから、加古との共同作業を維持していたようである。この共同作業こそが早期の外国人の日本語文学の実態といえよう。共同作業によって、キリスト教の書物を日本人の心に届けようとしたのである。

## 二、外国人の単独創作

1899年、B. H. チェンバレン (Basil Hall Chamberlain, 1850-1935) は、外国語を話せることだけに満足してはいけな、書き言葉を理解することが肝心だ、言語の歴史が書き言葉に凝縮されている、日本語はなおさらだ、と主張している<sup>xxx</sup>。

20世紀に入ってから、日本における外国籍の居住人口が増え続けた。国勢調査によれば、1920年は78,061、1930年は477,980、1940年は1,304,286となる。わずか20年間、6倍増加している。第二次世界大戦中、外国人が減り、1947年は546,934に減り、1950年は528,048となり、1930年の人数に近い。いわゆる「外国籍」とは、主に中国、イギリス、アメリカ、ロシア、フランス、ドイツ諸国の人であり、植民地朝鮮、台湾、樺太、南洋の人々も含まれる<sup>xxxi</sup>。1920年代から1930年代まで、外国人の中で日本語は国際語として使われている。ちなみに、2012年現在、外国人登録者数は2,038,159で<sup>xxxii</sup>、1940年のピーク時より70万人増えている。多数の外国人の日本滞在は、日本語話者の増加を意味し、日本語を共通言語とする人が少なくないことを意味する。そこで日本語文学の

作家が現れることも必然的である。

1900年代早期、キリスト教の聖人伝がよく刊行されていた<sup>xxxiii</sup>。パリ外国宣教会のブスケ神父(Julien Sylvain Bousquet, 1877-1943)は、聖女テレジア(Thérèse de Lisieux's, 1873-1897)の自伝 *L'histoire d'une ame* (ある魂の物語)を翻訳して、『小さき花』という題名で1911年出版した。「凡例」の中でブスケ神父は、「前後不揃や重複になつた箇所もあり且つ文筆に慣れざる者の筆記と、推敲の余日なさと、校正の粗漏とにより渋晦の跡多きは、訳者の深く慚る所である」と詫びている<sup>xxxiv</sup>。その謙虚さはブスケの単独訳を含蓄するだろう。12版には、そのような謙虚な文章がなくなり、かなりの部分は書き直され、磨かれている<sup>xxxv</sup>。この本は1930年まで15版を重ねる<sup>xxxvi</sup>。

ブスケ訳の『小さき花』は聖女テレジアの心の成長を物語り、多くの文人の関心を惹き付け、宮沢賢治(1896-1933)<sup>xxxvii</sup>をはじめ、三木露風(1889-1964)<sup>xxxviii</sup>、井上洋治(1927-2014)などに影響を与えていたとされている<sup>xxxix</sup>。だが、1942年ブスケ神父は憲兵に連行され、天皇とキリストとどちらが偉いかと質問されて、拷問の末、悲惨な最期を迎えた<sup>xl</sup>。

書物は一過性の対話ではなく、多くの人に読み継がれていくことが可能である。そのため、外国人の日本語創作は、日本語でなければ、伝えられない何かのメッセージがあるはずだ。これからは1920年代に日本語で書いた文学を発表した二人に触れたい。

### 三、日本語で書いて、日本語を超える

エロシェンコ(Vasili Eroshenko, 1890-1952)はウクライナ生まれの詩人である。4歳の時、麻疹で盲目となり、18歳の時、盲学校を卒業する。20歳の時、エスペラントを学び、イギリスへ留学。1914年日本へ来て、1915年5月東京盲学校に入学。早いスピードで日本語をマスターし、同

年9月に書いた随筆「雨が降る」は、宮崎滔天(1870-1922)との対面を描き、滔天の考えを紹介している<sup>xli</sup>。彼は点字ライターで書いたので、それを編集者が漢字仮名まじりの文章に直したのだろう。

翌年、彼はロシアの盲人教育について日本語で講演し、その講演稿は学校の雑誌に掲載された<sup>xlii</sup>。その後、彼はロシアの現代戯曲について評論を書いて掲載される<sup>xliii</sup>。彼は日本のエスペラント運動を積極的に推進し、秋田雨雀(1883-1962)、神近市子(1888-1981)、片上昇(1884-1928)、大杉栄(1885-1923)、中村屋の主人相馬愛蔵(1870-1954)と妻黒光(1876-1955)と親交を結ぶ。江口渙(1887-1875)は、エロシェンコが1921年4月に行った講演「災いの杯」について次のように書いている。「その時の彼の演説は実際一つの音楽であつた。詩であつた。歐洲人らしいアクセントをもつた日本語と、歐洲人らしい言ひ廻しとは更に彼の心の底から溢れ出る熱情と美しく響く声の調子とに助けられて、聴衆を飽くまで引きつけずには置かなかつた」<sup>xliv</sup>という感動をこめたコメントである。

この講演で、エロシェンコは日本の植民地支配を批判し、それが中国の反日運動を引き起こしたのだという。この講演稿は日本の雑誌に掲載されず、中国へ渡って、中国語に訳され、翌5月の雑誌に発表されている<sup>xlv</sup>。その後間もなく、彼は日本の官憲によって、危険人物と見なされて追放された。エスペラント運動を通して、日本を社会主義国と連携させようとする疑いをかけられたのである<sup>xlvi</sup>。

エロシェンコは、ロシア語で書いて他人が日本語に翻訳してくれることを待つよりは、最初から日本語で語り、書くことを選択している。日本語で書くことは、より早く、より直接に自分のメッセージを日本語話者に伝えることができるからだ。翻訳を待つことは、翻訳されない可能性も伴われる。

追放後間もなく、彼の二つの作品集が日本で出版された。『夜明け前の歌』(1921)と『最後の溜息』(1921)。三つ目の作品集『人類のために』はエスペラントで書いたため、日本語に翻訳され、出版されたのは三年後の1924年である。日本エスペラント学会の設立は1917年で、1922年の時点で会員は2000人であった<sup>xvii</sup>。エロシェンコはもしエスペラントだけで書いたなら、その影響力はかなり限られていただろう。

戯曲「桃色の雲」は、彼の日本語口語をよく示しているようである。秋田雨雀は「言葉のひどく可笑しいのは、書き直して、立派な日本語にしたと思はれるところも二三あつた。その他は全部君の唇から自然に溢れ出たもので、この美しい一篇の童話を読んでみると、君の容貌や、声音や口癖なぞまで、はつきり思ひ出されて、何とも云へない懐しさを感ずる」と書いている<sup>xviii</sup>。

エロシェンコの作品は、風刺によって、想像と現実を結びつける寓話的世界である。例えば、童話「狭い檻」(『夜明け前の歌』所収)では、主人公の虎は、世界のあらゆる生物に自由がないが、自由を与えられても、怖くて受け取ることができない、と観察している。

面白いことに、彼は『夜明け前の歌』の「自序」に次のように書いている。「私はこの話を日本で発表するつもりではなかつた。この話を、私は新しいロシアに外国の土産として持つて行かうと思つた。(中略)私にとつては、私の生命、私のいのちそのものが芸術にならねばならなかつた。その生命は私の第一の芸術。話を書くこと、演説に出ること、社会の芝居に出ること、それらは皆生命といふ大なる芸術の飾りに過ぎない」<sup>xix</sup>と。

彼は日本語で書くことが一時的な手段であり、自分のメッセージを日本に限らず、他の国々へも届けようとする。実際、彼の作品は魯迅(1881-1936)と周作人(1885-1967)によって、中国語に訳され、出版されている。コスモポリタンの彼は、ある国家、ある言語に執着せず、日本から

追放された後、上海と北京へ渡り、北京大学でエスペラントを教えることになった。

独裁を風刺し、自由を渴望する彼の作品群は1920、1930年代の日本と中国なら出版できるが、ソ連では無理だった。彼の最後の作品「赤い花」は、1923年3月に日本語で口述し、魯迅に中国語に訳され、刊行された。1989年にそれを再び日本語に戻して、出版したのは藤井省三である<sup>1</sup>。後にロシアに戻ったエロシェンコは沈黙のまま、1952年に逝去した。だが、彼の作品は日本の児童文学全集に収められ、日本で出版され、記憶されている<sup>ii</sup>。

#### 四、日本語によって世界へ発信

エリセーエフ(Serge Grigorievich Elisséeff, 1889-1975)は、ロシアのサンクトペテルブルグの富商の家の生まれ。ベルリン大学に留学したとき、新村出に出会い、日本留学の志望を伝えた。新村たちの助力で、1908年東京帝国大学に入学し、日本語と日本文学を学ぶ。早く日本語をマスターし、歌舞伎や落語を聴きに出かけ、長唄と日本舞踊を習う。夏目漱石の木曜会に参加する唯一の外国人である。その才能が漱石に買われて、『朝日新聞』の文芸欄にロシア文学の評論を寄稿することを要請された<sup>iii</sup>。

エリセーエフの日本語の話術はうまく、駄洒落をよく使い、周りの人を驚かせ、友人を嫉妬させたくらいである。芸妓たちに人気が高く、連れ立った友人が芸妓にあまり相手にされなくなるといわれる<sup>iiii</sup>。彼は日本古典文学に通曉し、卒論に芭蕉の俳諧を取り上げたが、幸田露伴(1867-1947)の『二日物語』だけが仏教用語が多くて理解しづらかった、とこぼしたことがある<sup>iv</sup>。

エリセーエフは1912年帝大を卒業して、1914年ロシアに帰国。最初はロシア革命を支持していたが、1919年5月に逮捕され、人質として銃殺を待つ身となり、彼の勤務校ペテルブルグ大学

と科学院の斡旋で十日間後に釈放された。その後、妻と二人の子供を連れて、1920年フィンランドへ亡命して、フランスに渡り、『朝日新聞』記者町田梓楼に偶然出逢う。町田からソ連での経験を書くように依頼された<sup>lv</sup>。

数ヶ月後、町田はエリセーエフから原稿をもらい、その日本語表現に感嘆した。『赤露の人質日記』と題されて、『朝日新聞』に1921年7月から10月まで連載された後、単行本として出版された。その初版本に手稿の一頁目の写真がある。彼の日本語表現の自在さがわかる<sup>lvi</sup>。町田は、「外国人の最も至難とする日本文を草するに此の困難を感ぜざるは真に敬服の外なく、本文は即ち悉く君の筆に成つたもので、余は唯極めて僅少なる字句につき助力したに過ぎぬ、外国人にして自己の日本文を以て読者に見ゆるは頗る珍重すべく、其の達文と観察眼とは読者の等しく讃嘆せらるゝ所であらう」<sup>lvii</sup>と感心している。

手記・日記という体裁をとる『赤露の人質日記』は感情の流露を抑え、ロシア社会の恐怖統治をリアリスティックに描写し、読者の関心を惹き付けて離さない。『日記』は1917年11月から始まり、亡命に成功した1920年9月まで続く。ソビエト政府は政府要員が一人暗殺されたら、人質を千人銃殺するという方針を公布する。人質とされるのは有産階級、旧軍人である。エリセーエフの妹の夫も銃殺され、身に付けていた外套だけが知らない人に着られて、妹の目に止まる。その段落で読者も鳥肌が立つ<sup>lviii</sup>。主人公一家が多くの艱難を経て亡命に成功した時、読者にも喜びが湧き上がるだろう。これほど読者を一喜一憂させたのは作家の鮮やかな語り口である。

この本は『朝日新聞』（1921年11月12日夕刊）に、日本語表現は日本人よりもまいと褒められ、『朝日』の記者中平亮の『赤色露国的一年』（1921）とともに読むように勧められた。エリセーエフの本はソ連の恐怖と飢餓を直に伝えるため、ロシア語で公表したら、処刑されただろう。日本語で書

いたからこそ海外で出版できたのである。

同書のロシア語原稿が見つまっている。日本語版と同じ内容だが、登場人物は実名入りである<sup>lix</sup>。彼はそのロシア語原稿を日本で教える言語学者ネフスキイ（Nikolai Nevsky, 1892-1937）に郵送し、ロシアへの帰国を戒めたのだろう。しかし、ネフスキイは日本人妻を伴ってソ連へ帰国し、同じペテルトベルグ大学で日本語を教えたが、「日本のスパイ」という罪名で夫婦ともども1937年処刑された<sup>lx</sup>。同じ年にエリセーエフは日本を訪れたが、常に憲兵の監視を感じ、居心地が悪かったようである。15年後の1952年に日本を再訪することになった<sup>lxi</sup>。

1934年、エリセーエフはハーバード大学へ招聘されて、東洋語学部の初代学部長となった。若い鶴見俊輔もそこで学習し、母親の草書の手紙を読めないときは、いつもエリセーエフに助けを求めていたと回想している。鶴見によれば、エリセーエフの語学力はロシア語、フランス語、ドイツ語、日本語、英語という順番になるという<sup>lxii</sup>。四番目の日本語もそれほど上級であるから、他の言語の熟練さは想像を超えるだろう。エリセーエフは日本語によって、ソ連の実況を世界に発信したのである。

## 結び：国際語になる日本語

外国人は日本語話者と交流する意欲が強いから、日本語で書いて、広く長く読み継がれることを期待するのだろう。上記の日本語著作は宗教的思想、文学的情緒、反独裁の考えを表している。本稿では触れていないが、1930年代、台湾、朝鮮、満州、中国など植民地の若者が日本語で詩と戯曲を書いて、反植民地運動に貢献している<sup>lxiii</sup>。

今日、約200万の外国人が日本語書物の読解力をもつと考えられる<sup>lxiv</sup>。過去20年、外国人が日本語で長編小説、短編小説、詩、和歌、俳句を書いて多くの文学賞を受賞している。たとえば、

リービ英雄は野間文芸新人賞 (1992)、大佛次郎賞 (2005)、伊藤整文学賞 (09) を、アレックス・カーは新潮学芸賞 (1994) を、デビッド・ゾペティはすばる文学賞 (1996)、日本エッセイスト・クラブ賞 (2002) を、アーサー・ピナードは中原中也賞 (2001)、講談社エッセイ賞 (05)、日本絵本賞 (07)、山本健吉文学賞 (08)、講談社出版文化賞絵本賞 (13)、産経児童出版文化賞 (13) を、田原は留学生文学賞 (2001)、H氏賞 (10) を、シリン・ネザマフィは留学生文学賞 (2006)、文学界新人賞 (09) を、楊逸は文学界新人賞 (2007)、芥川賞 (08) をそれぞれ受賞し、注目されている<sup>ky</sup>。21世紀の現在、もっと多くの外国人が日本語で執筆している。

日本語は16世紀から外国人によって使用されてきている。日本語の習得は容易ではないが、外国人は数百年も日本語にこだわり続けている。外国人の日本語文学によって、日本語は、日本人の間の「符牒」ではなくなり、「国際語」として機能しつづけていくだろう。

## 注

- i Alessandro Valignano, *Sumario de las cosas del Japón* (1583), *Adiciones del Sumario de Japón* (1592) Editados por José Luis Alvarez-Taladriz. Tokyo: Sophia University, 1954; 松田毅一他訳『日本巡察記』平凡社、1973年、pp. 26, 85. 村田昌巳「アレッサンドロ・ヴァリニャーノとヴィンチェンツォ・チマッティ (III) ヴァリニャーノと日本語」『サレジオ工業高等学校研究紀要』no. 40, 2013年3月、pp. 17-24. エンゲルベルト・ヨリッセン「16・17世紀におけるヨーロッパ人と日本語」『ピブリア』no. 102, 1994年10月、pp. 157-180.
- ii 杉本つとむ「第二章吉利支丹と日本語研究」『杉本つとむ著作選集：西洋人の日本語研究』八坂書房、1998年、p. 47.
- iii 杉本つとむ、同上、p. 50.
- iv ジョアン・ロドリゲス原著、土井忠生訳注『日本大文典』三省堂、1995年、p. 4.
- v 海老沢有道『キリシタン南蛮文学入門』教文館、1991年初版、1992年再版、pp. 28-29.
- vi 長谷川恒雄「16世紀前半の中国における宣教師に

日本語学習とその支援者—開国に備えての活動とその人脈関係—」椎名和男教授古希記念論文集刊行委員会編『国際文化交流と日本語教育—きのう・きょう・あす—：椎名和男教授古希記念論文集』凡人社、2002年、pp. 53-55.

- vii クリスチャン・ポラック「日仏交流略史」西野嘉章、クリスチャン・ポラック編『維新とフランス—日仏学術交流の黎明』東京大学総合研究博物館、2009年、pp. 50-60. 西岡亜紀「宣教師が運んだフランス—長崎・築地・横浜の「近代」—」『比較日本文学教育研究センター研究年報』10号、2014年3月、pp. 15-25.
- viii 「カトリック出版物」上智学院編『New Catholic Encyclopedia 新カトリック大事典』研究社、1996年、p. 1137. 佐藤快信、入江詩子、菅原良子、鈴木勇次「ド・ロ神父の外海での活動の研究意義」『地域総研紀要』7巻1号、2009年、pp. 73-78.
- ix 矢野道子『ド・ロ神父その愛の手』著者出版、2004年、p. 46.
- x 矢野道子『ド・ロ神父黒皮の日日録』長崎文献社、2006年。
- xi 片岡弥吉『ある明治の福祉像：ド・ロ神父の生涯』日本放送協会、1977年1刷、1996年3刷、pp. 61-62.
- xii ヴィリヨン閔、加古義一編『日本聖人鮮血遺書』京都：村上勘兵衛、1887年；京都：加古義一、1888年；訂正増補第6版、聖若瑟教育院、1911年；日本カトリック刊行会、1926年（序はVillionの仏語原稿の印影あり、日本語訳ある、書名と著者名はVillionの自筆）；第7版、西宮：日本殉教者宣伝会、1931年。
- xiii 松崎実「自序」『考注切支丹鮮血遺書』改造社、1926年、p. 5.
- xiv 山梨淳「パリ外国宣教会の出版物と近代日本の文学者」『キリスト教文化研究所トマス・アクィナス研究所紀要』25巻1号、2010年、pp. 92-98.
- xv 松崎実「諸説」『考注切支丹鮮血遺書』p. 10.
- xvi 松崎実「自序」『考注切支丹鮮血遺書』pp. 6-7、「諸説」『考注切支丹鮮血遺書』p. 11.
- xvii 松崎実「自序」『考注切支丹鮮血遺書』p. 7、「諸説」『考注切支丹鮮血遺書』p. 12.
- xviii 新村出「改版序文」松崎実『考注切支丹鮮血遺書』p. 3.
- xix 山梨淳「パリ外国宣教会の出版物と近代日本の文学者」『キリスト教文化研究所トマス・アクィナス研究所紀要』25巻1号、2010年、p. 93.
- xx ヴィリヨン閔、加古義一編『婆羅門教論：仏教起源』京都：清水久次郎、1889年。

- xxi ヴィリヨン関、加古義一著『山口公教史』京都：加古義一、1897年。
- xxii ヴィリヨン関、加古義一編『長門公教史』京都：加古義一、1918年。
- xxiii 例えば、狩谷平司『ピリヨン神父の生涯』大阪：稲畑香料店、1938年；萩原新生「ピリヨン神父のこと」萩原『青春の夢』高松書房、1943年；鮎川義介著「ヴィリヨン神父の思い出」友田寿一郎『鮎川義介縦横談』創元社、1953年；山崎忠雄『偉大なるヴィリヨン神父：ヴィリヨン神父にまねびて』東京：山崎忠雄、1965年。
- xxiv スタイシエン著、ピリヨン譯『切支丹大名史』三才社、1929年。
- xxv シュタイシエン著、吉田小五郎譯『切支丹大名史』大岡山書店、1930年。
- xxvi 「序言」スタイシエン著、ピリヨン譯『切支丹大名史』。
- xxvii スタイシエン著、ピリヨン譯『切支丹大名史』pp. 1-2.
- xxviii シュタイシエン著、吉田小五郎譯『切支丹大名史』p. 1.
- xxix 今宮新「切支丹大名記、シュタイシエン著、吉田小五郎譯、大岡山書店発行」『史学』第9巻第4号、1930年12月、p. 165.
- xxx Basil Hall Chamberlain, *A Practical Introduction to the Study of Japanese Writing*, London: Sampson Low, Marston & Co., LD, 1899, 『文字のしるべ』p. 13.
- xxxi 『大正9年国勢調査報告』『昭和5年国勢調査最終報告書』『戦前期国勢調査報告集、昭和15年』『我が国人口の概要 昭和22年臨時国勢調査報告』『昭和25年国勢調査報告第4巻、全国1編』、また磯田則彦「日本における外国人人口の分布とその変化」『福岡大学人文論叢』第37巻第3号、2005年12月、pp. 845-860.を参考。
- xxxii 法務省「平成24年末現在における在留外国人人数について（速報値）」[http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04\\_00030.html](http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00030.html)
- xxxiii 山梨淳「パリ外国宣教会の出版物と近代日本の文学者」『キリスト教文化研究所トマス・アキナス研究所紀要』25巻1号、2010年、p. 98.
- xxxiv シルベン、ブスケ譯『小さき花：乙女テレジア之自叙伝』聖若瑟教育院、三才社、1911年、p. 7.
- xxxv シルベン、ブスケ譯『小さき花：乙女テレジア之自叙伝』12版、福音書店、三才社、1925年。
- xxxvi シルベン・ブスケ譯『幼な子に倣ひて：聖女小さきテレジアの踐まれし愛の道』光明社、1930年、「広告」。
- xxxvii 板谷栄城「賢治徒『小さき花』」『宮沢賢治研究』7号、1997年、pp. 401-405.
- xxxviii 大谷恒彦「ブスケ神父と三木露風」『姫路人間学研究』2巻1号、1999年、pp. 67-68; 近藤健史「三木露風と聖女テレジア賛歌」『研究紀要』（日本大学通信教育部）20号、2007年、pp. 21-38.
- xxxix 井上洋治「リジュアのテレーズをめぐる」井上洋治、山根道公『風のなかの想い』日本基督教団出版局、1989年。
- xl 大谷恒彦「ブスケ神父と三木露風」『姫路人間学研究』第2巻、第1号、1999年3月、p. 67.
- xli エロシエンコ「雨が降る」『早稲田文学』1916年2月号、no. 123.
- xlii エロシエンコ「私立露国モスコウ盲学校状況」『内外盲人教育』1916年5月、5巻春号、p. 23.
- xliii エロシエンコ「露西亜文学に現はれたる女性」『層雲』1916年7月、6巻7月号。
- xliv 江口渙「エロシエンコ・ワシリー君を憶ふ一序に代へて」エロシエンコ著、秋田雨雀編『最後の溜息』叢文閣、1921年12月、p. 8. 初出は『読売新聞』1921年6月17～21日。
- xlvi 藤井省三『エロシエンコの都市物語：1920年代東京・上海・北京』みすず書房、1989年、p. 32.による。
- xlvii 藤井省三『エロシエンコの都市物語：1920年代東京・上海・北京』みすず書房、1989年、p. 49.
- xlviii 川原次吉郎『エスペラント概論』エスペラント同人社、1923年、pp. 53-55.
- xlviii 秋田雨雀「童話劇「桃色の雲」を読んで」エロシエンコ著、秋田雨雀編『最後の溜息』叢文閣、1921年12月、p. 11.
- xlix エロシエンコ、秋田雨雀編『夜明け前の歌：エロシエンコの創作集』叢文閣、1921年、「自序」p. 5.
- l 藤井省三『エロシエンコの都市物語：1920年代東京・上海・北京』みすず書房、1989年、pp. 204-212.
- li 『日本児童文学全集：第12巻、少年少女小説篇2』（河出書房、1953年）はエロシエンコの「二つの小さな死」「狭い籠」を収め、『少年少女日本文学全集7：小泉八雲・秋田雨雀・山村暮鳥集』（講談社、1977年）はエロシエンコの「海の王女と漁師」「鷺の心」「せまい檻」「一本のなしの木」を収める。
- lii 倉田保雄「解説—エリセーエフ小伝」エリセーエフ『赤露の人質日記』中央公論社、1976年初版、1986年再版、pp. 151-182.
- liii エリセエフ、安倍能成、中村吉右衛門、小宮豊隆「エリセエフを囲んで」『図書』1953年、43号、p. 17.
- liv 川口久雄「芍薬の花—『エリセーエフ開書』序書」



- 『季刊芸術』第11巻第2号、1977年、p. 100.
- lv 倉田保雄「解説—エリセーエフ小伝」エリセーエフ『赤露の人質日記』中央公論社、1976年初版、1986年再版、pp. 151-182.
- lvi エリセーエフ著『赤露の人質日記』朝日新聞社、1921年。
- lvii 町田梓楼「序文」、エリセーエフ『赤露の人質日記』大阪朝日新聞社、1921年。
- lviii エリセーエフ『赤露の人質日記』中央公論社、1976年初版、1986年再版。
- lix 日野貴夫、河合忠信「エイリセーエフ「赤露の人質日記」露文草稿（1）」『ピプリア』no. 100、1993年10月、p. 345.
- lx 松山真一「エリセーエフとネフスキイ」『立命館経済学』第46巻第6号、1998年2月、p. 17.
- lxi エリセエフ、安倍能成、中村吉右衛門、小宮豊隆「エリセエフを囲んで」『図書』1953年、no. 43, p. 18.
- lxii 鶴見俊輔「エリセエフ先生の思い出——東と西の出会い——」『図書』2000年4月、no. 612、pp. 2-6.
- lxiii 柳書琴「台湾作家吳坤煌の日本語文学—日本語創作の国際的ストラテジー」郭南燕編『バイリンガルな日本語文学—多言語多文化のあいだ』三元社、2013年、pp. 226-245.
- lxiv 郭南燕「序章 バイリンガルな文学とは？」郭編『バイリンガルな日本語文学』p. 12.
- lxv 郭南燕「日本語文学のバイリンガル性」郭編『バイリンガルな日本語文学』pp. 421-436.